

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 18 日現在

機関番号：34406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24510361

研究課題名(和文) 東チベットにおける「宗教紛争の構造」と「宗教ネットワークの形成」に関する研究

研究課題名(英文) Research on the Structure of Religious Conflicts and the Formation of Religious Networks in Eastern Tibet

研究代表者

川田 進 (KAWATA, Susumu)

大阪工業大学・工学部・教授

研究者番号：10288756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：主に中国四川省、青海省、雲南省、甘肅省のチベット地区を対象に、チベット仏教とイスラームの調査を行った。

その結果、「2008年チベット騒乱」の構造解明、文化大革命終息後の中国共産党の宗教政策の変遷、宗教NGOによる公益活動の動向、チベット仏教を中心とした宗教ネットワークの形成を明らかにすることができた。

現在、中国の政治と宗教の関係を論じる上で最も重要な視点は、中国共産党の統一戦線活動である。本研究は、ラルン五明仏学院の事例を用いて、チベット仏教ニンマ派と中国政府の関係を証明した。

研究成果の概要(英文)：Field research on Tibetan Buddhism and Islam was conducted mainly in Tibetan Autonomous Regions of Sichuan Province, Qinghai Province, Yunnan Province, and Gansu Province. The findings shed light on the 2008 Tibetan unrest, the transition of religious policy of the Chinese Communist Party after the end of the Cultural Revolution, developments in public-interest activities by religious NGOs, and religious networking with Tibetan Buddhism at the center. At present, the most important perspective in discussing the relationship between Chinese politics and religions is given by the Chinese Communist Party's united front activities. This study, citing the case of the Serthar Buddhist Institute, demonstrates the relationship between the Nyingma tradition and the Chinese government.

研究分野：アジア地域研究

キーワード：宗教政策 民族問題 中国共産党 チベット イスラーム 宗教ネットワーク 宗教紛争

1. 研究開始当初の背景

1991年以降、東チベット（四川・青海・甘粛・雲南各省内のチベット人居住地区）にて、中国共産党の民族政策・宗教政策に関する現地調査を20回実施し、25篇の研究論文・調査報告を発表してきた。

中国領内少数民族地区における宗教政策研究は、中国政府にとって政治的に敏感な問題であり、中国国内の研究者は政府に批判的な内容を含む研究を実施することができない。日本を含む外国人研究者は、これまで中国共産党の宗教政策に関する文献理論研究・チベット政策研究を行うことは可能であったが、東チベット現地調査（宗教問題・民族問題）の実績は極めて乏しい状況にあった。

2. 研究の目的

東チベットは中国共産党の統一戦線活動（主に宗教政策）にとって重要な舞台である。とりわけラルン五明仏学院（四川省甘孜チベット族自治州色達県）とヤチェン修行地（同白玉県）は、鄧小平から胡錦濤時期の宗教政策の動向を確認する上で格好のスポットである。

本研究では、両地点における漢人・華人信徒の動向把握に重点を置いた。そして両地点の宗教的特質を明確にする目的で、東チベットの他地域及び新疆ウイグル自治区の宗教状況も調査対象に加えた。

3. 研究の方法

- (1) 東チベット、新疆ウイグル自治区他で現地調査を実施した。
- (2) 雑誌「中国宗教」、研究書「経略西藏」、資料集「宗教事務条例」等に基づき、中国共産党の宗教政策及びチベット政策の動向を把握した。
- (3) 漢人信徒が作成した東チベット宗教事情に関する資料を入手し、漢人知識人の宗教信仰の現状と歴史を分析した。
- (4) 「2008年チベット騒乱」の構造を分析した。

4. 研究成果

(1) ラルン五明仏学院

2012年8月に調査。今回が6回目。前回2011年の訪問時と比べて気づいた変化の一つは、巨大な肖像の増加である。経堂や新規開業したラルンホテル（喇榮賓館）の屋上に、ジグメ・プンツォ前学院長の肖像が設置されていた。ヤチェン修行地のアチュウ・ラマ同様、高僧に対する畏敬の念は圓寂後も続く現象を視覚化したものである。これは同時に、現地の公安当局が仏学院に対する過度な規制を解除したことの表れとも理解できる。

2007年訪問の時点までは、色達県公安局がラルン五明仏学院の入り口にチェックポストを設け、外国人の進入を禁止していた。漢人はチェックポストで身分証を提示し、カメラを預けた後に入場が許可されていた。漢人

観光客の多くは信仰を持たない訪問者であり、主たる目的は巨大な僧房群の撮影、鳥葬の見学、高地体験（海拔約3800メートル）である。彼らは宗教と学問の空間を乱す侵入者であるとともに、一種の宗教的な体験を求め新たな世界観を開く「巡礼者」でもある。ラルン五明仏学院について言えば、多くの学僧にとって、撮影目的の来訪者は学問の場の空気を乱すノイズである。ただし、カメラとビデオを抱えた来訪者の存在が、かつての肅正事件の再発を抑止する役割も果たしている。そして漢人訪問者の存在は、仏学院にやって来たチベット仏教を信仰する中国共産党員（主に漢人）の隠れ蓑にもなっている。筆者はラルン五明仏学院を「宗教と観光が交差することで生じる文化的な変容」[岡本亮輔『聖地巡礼』中央公論新社、2015、28頁]として論じる必要性を感じている。



図1 経堂の屋根に設置されたジグメ・プンツォ前学院長（左）とムンツォ現学院長（右）の肖像（2012年8月、川田撮影）



図2 漢人見学者を意識した新たな鳥葬場（2012年8月、川田撮影）

(2) ヤチェン修行地

2012年8月に調査。今回が6回目。滞在中、修行地主宰者アソン・リンポチェの二つの講義を拝聴した。一つは新大経堂前の広場で朝8時から始まるチベット人出家者を対象とした講義である。早朝講義はアチュウ・ラマの時代から引き継がれており、1時間から2時間かけて行われる。チベット仏教の世界では、高僧の死後も信徒の畏敬の念は存続する。アソン・リンポチェは当面アチュウ・ラマのカリスマ性を巧みに利用しながら修行地での支配力をより強固にしていくであろう。アチュウ・ラマはヤチェン修行地が発展する過程で自らの卓越した呪力を誇示したが、アソン・リンポチェ以後の後継者にもはや呪力は必要ない。今後、師資相承と化身ラマという

チベット仏教が持つ二つの制度を組み合わせさせた支配体系がうまく機能していくと予想される。

もう一つの講義は、閉関修行僧坊横の小経堂で行われる。ここは「漢僧経堂」とも呼ばれ、アソン・リンポチェが漢人の出家者と在家信徒を指導する教場である。現在、ヤチェン修行地の構成員は、チベット人出家者の他に、数百名の漢人出家者と在家信徒がいる。漢人の滞在者数は流動的であり、夏は増加し冬は減少する。ヤチェンで漢人指導を行う高僧は、アソン・リンポチェの他に、プーバ・タシ・リンポチェとイエシェ・ジャンツォ・リンポチェがいる。後者2人はヤチェンに常駐しているわけではない。ヤチェンに不在時は中国国内の漢人居住地区で法話会を開き、弘法活動を精力的に行っている。



図3 アソン・リンポチェの早朝講義 (2012年8月、川田撮影)



図4 漢僧経堂で講義を行うアソン・リンポチェ (2012年8月、川田撮影)

(3) デルワザ・モスク

新疆ウイグル自治区インギサル(英吉沙)県に位置する。2013年10月に金曜午後の礼拝に参加した。モスクには約400人の男性信徒が集まり、集団礼拝を行っていた。モスク入口には、ウイグル人の公安関係者が待機し、「見せる警備」「見せる監視」を行っていた。金曜の集団礼拝は、信徒と公安の間でトラブルが発生することがあるからだ。



図5 デルワザ・モスク(インギサル県)と

監視カメラ(2013年10月、川田撮影)



図6 デルワザ・モスク「五好」宗教活動場所認定証(2013年10月、川田撮影)

図6はモスク内に掲げられていた表彰パネルである。左は2003年8月にカシュガル地区民族宗教事務局が認定。右は2002年8月に新疆ウイグル自治区宗教事務局が認定したものである。政府の宗教事務局がいつからこの認定活動を開始したのかは明らかでないが、新疆ウイグル自治区では「宗教事務条例」(2005年3月施行)制定以前の2002年に行われていることが確認できた。「五好」とは具体的には「法令遵守、民族団結、場所管理、宗教和諧、環境衛生をしっかりと行っている」ことを意味している。「場所管理」とはモスクの民主管理委員会が政府の宗教管理の方針に基づいて、モスクの運営、財務管理、安全管理を行っていることを示す。

「五好」に関して、2015年時点で「双五好」(二つの「五好」という運動が展開されている。一つは「五好」宗教活動場所の認定、もう一つは「五好」宗教人士の選出である。後者の「五好」は、「經典解釈、民族団結、擁護安定、愛疆公德、先導的役割」に優れた宗教指導者を選出し表彰する制度である。「擁護安定」とは、「暴力に反対し、法制と秩序を重んじる」という中国共産党の新疆政策「一反両講」(暴力に反対し、法制と秩序を重んじる)を踏まえたものである。「愛疆公德」は愛国愛疆、經濟發展、公益活動等を重視する態度を養うことである。「先導的役割」は、中国共産党の民族宗教政策を支持し、法律を遵守し、「三股勢力」(宗教的過激派、民族分裂主義者、国際テロ組織)に反対する姿勢を積極的に示すことである。以上のことから、新疆ウイグル自治区における「五好」宗教人士の顕彰は、中国共産党の宗教政策と新疆政策を体現した政治色の濃い制度であると言える。

(4) 学術書(単著)出版

『東チベットの宗教空間——中国共産党の宗教政策と社会変容』(2015年、北海道大学出版会)を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

- (1) 川田進「茶馬古道とキリスト教——孫明経が撮影した西康省」『火鍋子』79、138-146頁、2012年7月、査読なし
- (2) 川田進「中国政府の宗教政策と「公益」活動——チベット系仏学院の震災救援活動を通じて」『宗教と社会貢献』2(2)、

- 1-16 頁、2012 年 10 月、査読あり
- (3)川田進「2013 年四川地震」と西康省時期の雅安」『火鍋子』80、146-152 頁、2013 年 7 月、査読なし
- (4)川田進「東チベット研究の「原石」と宗教空間」『火鍋子』81、180-189 頁、2014 年 4 月、査読なし
- (5)川田進「毛沢東から胡錦濤時期における中国共産党の宗教政策とチベット政策」『大阪工業大学紀要』59(1)、25-54 頁、2014 年 9 月、査読あり
- (6)川田進「宗教政策と宗教文化に関する JSPS 科研費海外調査報告(2012 年度～2013 年度)」『大阪工業大学紀要』60(2)、13-35 頁、2016 年 2 月、査読あり

〔学会発表〕(計 3 件)

- (1)川田進「中国共産党の宗教政策から見たラリン五明仏学院の動向」、「宗教と社会」学会全国大会、皇學館大学、2013 年 6 月 15 日
- (2)川田進「チベット仏教の中台交流と中国共産党の宗教政策」、日本宗教学会全国大会、同志社大学、2014 年 9 月 13 日
- (3)川田進「チベットの宗教空間」、日中社会学会全国大会、北海道大学、2015 年 6 月 7 日

〔図書〕(計 1 件)

- (1)川田進『東チベットの宗教空間——中国共産党の宗教政策と社会変容』北海道大学出版会、2015 年 2 月、全 452 頁

〔産業財産権〕

- 出願状況 (計 0 件)
- 取得状況 (計 0 件)

〔海外現地調査〕

- (1)東チベット宗教調査
期間：2012 年 8 月 16 日～8 月 26 日
場所：四川省定康県、甘孜県、白玉県、色達県、馬爾康県
- (2)ネパール宗教調査
期間：2013 年 8 月 7 日～8 月 11 日
場所：カトマンズ
- (3)東チベット宗教調査
期間：2013 年 8 月 25 日～9 月 3 日
場所：青海省西寧市、玉樹県、囊謙県、雜多県
- (4)新疆ウイグル自治区宗教調査
期間：2013 年 10 月 23 日～10 月 29 日
場所：ウルムチ市、ヤルカンド、インギサル、カシュガル
- (5)東チベット宗教調査
期間：2014 年 8 月 28 日～9 月 5 日
場所：甘肅省蘭州市、瑪曲県、碌曲県、夏河県、臨夏県
- (6)東チベット宗教調査
期間：2014 年 10 月 21 日～10 月 27 日
場所：雲南省香格里拉県、徳欽県

(7)東チベット宗教調査

期間：2015 年 8 月 5 日～8 月 14 日
場所：甘肅省臨夏市、迭部県、卓尼県、岷県、広河県、合作市、青海省循化県

6. 研究組織

- (1)研究代表者
川田進 (KAWATA SUSUMU)
大阪工業大学・工学部・教授
研究者番号：10288756
- (2)研究分担者 なし
- (3)連携研究者 なし